



建設中の2号機。ビニールシートに覆われた三菱重工業製のガスタービンと三菱電機製の発電機が据え付けられた

ヨーロッパのような石造りの建物が
並ぶバクーの街並み



アゼルバイジャン
from **AZERBAIJAN**
生まれ変わる火の国

旧ソビエト連邦の一国、アゼルバイジャン。
電力の8割以上を火力発電でまかなっているが、
発電所の老朽化が深刻な問題。
そこで、国のさらなる発展のカギとなるのが、新しい発電所の建設だ。



効率が悪い
年代物の火力発電所

火の国。これは、カスピ海に面するアゼルバイジャンの別名。岩から噴き出した天然ガスに落雷が引火したり自然発火したりする現象が太古から見られ、いつしか「火」を意味する古語「A z e r」



建設会社のプロジェクトマネジャーとその日の工事の内容を毎日確認する佐藤さん(右手前から3人目)

が国名の由来になったそうだ。そのいわれの通り、石油や天然ガスなどが豊富な資源国。旧ソビエト連邦の一つだったが、1991年に独立を果たし、石油・天然ガス産業に依存して成長してきた。

首都バクーを歩くと、重厚な石造りの建物が並ぶ。国民の多くはイスラム教徒だが、それを忘れてしまおう。そこはヨーロッパにいるかのような雰囲気だ。「バクーは「風の街」という意味。常にカスピ海からの風が吹いている。国も街の名前も、なんだか口

も見据えた新しい効率的な発電所。そこで日本の支援により98年から建設が始まったのが、シマル・ガス火力複合発電所1号機だ。燃料は自国に眠る豊富な天然ガス。送電時にロスが生まれないよう首都近郊に建設した。2002年から稼働し、首都圏の電力需要の約2割、400メガワットの電力を届けられるようになった。05年からは、同等の発電能力を持つ2号機の建設を進めている。

1、2号機共に、発電機を動かすガスタービンは日本の三菱重工業製。その強みは、コンバインドサイクル発電という最新の技術だ。発電時の排熱を再利用してさらに発電できる仕組みで、既存の発電所と比べて発電効率が格段に高くなる。

しかし、その性能を最大限に発揮するには、ガスタービンなどの主要機器と配管などの周辺部品を正確につなげなければならぬ。そこで佐藤さんは、現地の電力公社の職員や建設会社のスタッフ、ガスタービンの製造元である日本企業の社員などの間に立ち、工事のスケジュールを確認したり、現場を訪れて施工に問題がないか確認したり、安全管理ができていないかチェックしたりと忙しい。「旧ソ連時代の古い考え方の人もいて、安全管理や国際基準などをなかなか分かってもらえないという

マンチックですよ」。そう話すのは、この国で発電所建設に携わる佐藤光行さん(東電設計株式会社)。中国、インド、タイ、クロアチアなどで発電所の建設を支援してきた彼は、「変わり者だから海外でも行ってこい！」なんて言われて早20年、世界各地を飛び回っています」と笑う。

佐藤さんが初めてアゼルバイジャンに足を踏み入れたのは98年。首都近郊に新しい発電所を建設するためだった。

独立後、領土をめぐる隣国アルメニアとの紛争が94年まで続き、その間、新しい発電所の建設や送電線の整備といった電力セクターへの投資はほとんど行われなかった。その結果、停戦後に経済が回復し、電力需要が伸びても供給が追いつかず、ぎりぎりの状態だった。

「首都圏への電力は300キロも離れた発電所から送られ、送電の間に電力の一部が失われていました。さらに、80年代から使い続けてきたため、どんどん老朽化が進み、発電効率が悪くなっていったという課題もありました」と佐藤さんは当時を振り返る。

新しい発電所で
産業を支える

国の発展のために必要とされていたのは、将来の電力需要の伸び

苦勞もあります。でも今、この国は新しい国づくりに挑戦している。それに役立てると思うとやりがいがあります」と話す。

現在建設中の2号機からの電力は、首都近郊の大規模工業団地「スムガイトテクノロジパーク」にも供給される予定。石油・天然ガス産業への依存が強かったアゼルバイジャンだが、電気ケーブルやパイプといった高品質な工業製品の製造など、新しい産業の育成に力を注いでいる。この2号機が完成すれば、安定した電力供給が実現し、新たな産業の創出に貢献できるはずだ。

アゼルバイジャン全土にある古い発電所を効率的なものに変え、電力の安定供給を実現させていく。これこそ、この国のさらなる発展のカギだ。



すでに稼働しているシマル・ガス火力複合発電所1号機。首都圏への電力の安定供給に多大な貢献を果たしている